

変化と対応



倉光 英樹

日本分析化学会中部支部・令和6年度支部長を務めております富山大学の倉光と申します。本稿の締切は2月末ということでしたが、私にしては珍しく早めに執筆しようと思い、年末年始にこの原稿と向き合っております。これから始まる任期中に何をすべきか、何ができるのかなどを考えると、胸が「キュッ」とするような緊張を感じます。執筆内容を考えている最中、北陸は元旦から能登半島地震に見舞われ、さらに余震が続く翌日には羽田空港で燃え盛る飛行機のライブ映像が地震速報と同時中継されるといった異例の年明けとなりました。震災支援の飛行機事故ということで、なんとも痛ましいことです。古くからある立山信仰のせいかな、県民は富山が天災の少ない地域であるとの印象をもっていますが、今回の地震では多くの方が高台の公園や避難所に足を運んでいました。我が家でも、断水と停電に備えて、湯船に水を張り、炊飯を済ませ、携帯やバッテリーの充電、防寒着と暖房器具、調理用のカセットコンロ、ラジオと懐中電灯などを確認してから床に就きました。このような災害所作は、東日本大震災や胆振東部地震におけるブラックアウトなどを経て、近年、社会に浸透するに至ったものかと思います。つまりは、災害頻発への適応でしょう。

大学における校務に関しても、俗にいうコロナ明けは、便利なはずの非対面業務の促進なども起因して仕事量が劇的に増加しました。さらに生成AIへの対応とも相俟って、教育現場における仕事量は^{あいま}閾値を超えています。この巨大な変化の大波に器用に乗ることのできていない方も多いのではないのでしょうか、私もそんな一人です。学会活動も、人々の対面交流が極端に制限されたコロナ禍の状況から、従来に近い活動が可能になる過程で、年会や討論会が各実行委員長をはじめ諸先生方の大変な気苦労を伴う甚大なご労力によって盛大に実施されましたが、これにも様々な変化への対応が含まれていたことは言うまでもありません。昨年は、第83回分析化学討論会を富山大学で開催することもでき、夏期セミナーや高山フォーラムなど伝統と特徴ある中部支部行事が従来に近い形式で実施されました。このような素晴らしく前向きな変化への対応に尽力できることは幸せなことであると思える一方で、仕事量を増やす一方の対応には限界があるのも事実。学会員の急速な減少への対策や時代に適応した学会と企業との連携の在り方など、学会運営にも変化が求められています。小さな工夫から大きな改革まで、様々な試みを検討し、実施することが必要とされている重要な局面ではありますが、学会をつくるメンバーと顔を合わせながらワクワクする気持ちで頭を捻るといった、ストラテジックには昔から何ら変わらない対応が実務のやり方として最善であることは明らかです。

〔KURAMITZ Hideki, 富山大学学術研究部理学系, 中部支部長〕